

**格差の連鎖・蓄積モデルからみたライフコースと不平等
に関する総合的研究**

A Comprehensive Study of Life Course and Inequality Using the Framework of Cumulative Advantages and Disadvantages

課題番号：18H05204

石田 浩（ISHIDA Hiroshi）

東京大学・特別教授室・特別教授



研究の概要（4行以内）

本研究は、一時点の横断調査に頼るのではなく、若年・壮年・中高年者を対象にしたパネル（追跡）調査を長期に渡り蓄積することで、若年から壮年さらには中高年期にいたるライフコースの過程において格差・不平等がどのように連鎖・蓄積していくのかというメカニズムを解明することを目指す。

研究分野：人文社会系・社会学

キーワード：格差 不平等 ライフコース パネル調査 計量分析

1. 研究開始当初の背景

若年者を取り巻く非典型雇用、低賃金、長時間労働など就業をめぐる問題は、晩婚化・未婚化・少子化につながる優先して解決されるべき重要な社会的課題として認知されてきており、格差・不平等についての社会的な関心も高まっている。しかし、1 時点の横断的調査データでは格差の断面はわかるが、どのようにして1 時点の格差（有利・不利）が蓄積していくのか、格差の連鎖を断ち切る要因は何なのかを検証することはできない。

2. 研究の目的

そこで本研究では、「なぜ格差は連鎖・蓄積していくのか」を研究課題の核心をなす学術的問いとして据え、若年・壮年・中高年を対象にしたパネル（追跡）調査を長期間継続することにより、それに対する答えを探る。

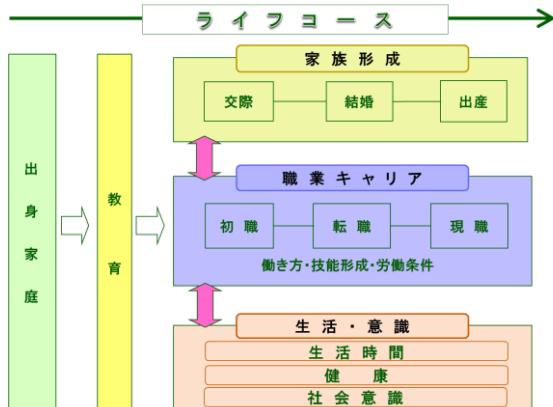


図1 ライフコースの流れ

本研究は、図1に示すように若年から壮年さらには中高年期にいたるライフコースの軌跡 (trajectories) を、社会的背景・教育・就業・家族・健康・意識といった多面的な側面から総合的に捉え、ライフコースの中で格差がどのように生成され連鎖・蓄積していくのかを検証する。

3. 研究の方法

本研究プロジェクトは、若年・壮年パネル調査、高卒パネル調査、中高年パネル調査という個人を長期に渡り追跡する調査を継続している。2007年に日本全国に居住する若年（20-34歳）と壮年（35-40歳）を対象として追跡していく「働き方とライフスタイルの変化に関する全国調査」、2004年3月に卒業した高卒者を追跡する「高校卒業後の生活と意識に関する調査」、2010年に50歳から84歳の中高年を対象とした「中高年者の生活実態に関する継続調査」を実施してきた。

新規の調査としては、2007年開始の若年・壮年パネル調査の対象者が30歳代になったことをうけて、新たに20歳代の若年者を対象とした若年リフレッシュサンプルパネル調査を2019年から開始した。3世代の格差の連鎖・蓄積を検証するために、新たに「親子関係についての人生振り返り調査」を60-69歳の日本全国に居住する男女を対象に2019年に実施した。

さらに、新型コロナウイルス感染症の拡大が調査の対象者にどのような影響を及ぼしてきたのかを検証するために、2020年秋にオンラインによる特別調査を実施した。

4. これまでの成果

「格差の連鎖・蓄積」の概念は、ライフコースのある時点の有利さ・不利さがその後の時点の有利さ・不利さに影響を与えることを意味するが、影響の与え方のパターンとして以下の3つが考えられる。第1の「格差の連鎖・継続」パターンは、初期の段階であった有利・不利の格差が、時間の経過とともに維持され、その後のライフステージでも変わることなく有利なグループと不利なグループの間の違いが継続していく状態を表す。第2の「格差の蓄積・拡大」パターンは、初期にみられた2つのグループの間の格差が、ライフステージを通過していく中で拡大していく状態である。有利なグループがますます有利に、不利なグループはますます不利な状態へと分化していく。第3の「格差の縮小・挽回」パターンは、初発の時点であったグループ間の格差が、時間の経過とともに縮小し、不利なグループが有利なグループとの差を挽回していく状態を表すパターンである。

『人生の歩みを追跡する』(2020年、勁草書房)では、ライフコースの多様な側面に関する格差の生成過程を上記の3つのパターンとの関連を考慮しながら検討した。健康と社会的孤立に関する格差の分析では、第1の格差の連鎖・継続パターンが適合的であるという結果が得られた。出身家庭の経済的豊かさや18歳時までの疾患・障がいは、成人後の健康度に持続的な影響を及ぼしており、学校での被いじめ経験が孤立から脱出しづらくさせてしまうなど、若年期における有利・不利の格差が、その後の人生にも連鎖してしまう可能性のあることが明らかになった。他方では、所得などの経済的格差については、第2の格差の蓄積・拡大のパターンの可能性があることが示唆された。結婚・出産などのイベントは、男女間の収入格差をさらに拡大してしまうこと、転職は学歴間の所得格差を拡大する傾向のあることが明らかになった。しかしながら、貧困状態への参入と脱出の分析では、結婚というイベントが貧困状態から女性が抜け出すきっかけとなる可能性のあることが示唆され、第3の格差の縮小・挽回パターンの例として考えられる。

このように格差が生成されてくるパターンは、個人が経験するライフコースのすべての側面に関して一様であるわけではない。個人の生活と意識を様々な分析視角から丁寧に跡付けることにより、異なるパターンが出現する可能性を明らかにすることができる。パネル調査データを活用することで、個人間にみられる多様な側面の格差が、時間の経過やライフステージの移行とともにどのように生成され、変化していくのか、一定の時間的スパンの中で観察することが可能となり、格差の連鎖・蓄積のメカニズムを詳細に理解していく手掛かりを与えてくれる。

5. 今後の計画

今後も複数のパネル調査を継続して企画・実施していく。個別の研究班での調査データの分析とともに、班を超えた形で形成されている、一度不利な状況に陥った人々が、どのようにそこから抜け出していくのかに着目した「セカンドチャンスの研究」と、親子3世代に渡って格差が連鎖する仕組みを分析する「3世代の格差の連鎖・蓄積の研究」の2つのグループでの研究を継続し、成果をまとめていく。国内外の学会での報告、国際ジャーナルなどへの投稿・出版を積極的に進める。研究成果を広く還元する目的で、メディア向けにプレスリリースを行い、年度末には成果報告会を「東大社研パネル調査コンファレンス」として一般向けに開催する予定である。

蓄積したパネル調査データは、公共財として学術研究のために公開しており、二次分析研究や教育での利用として活用が可能である。また若年・壮年パネル調査を用いた国際比較研究が可能となるようにデータ組み換え作業に取り組んでおり、台湾・韓国の研究グループと共同で国際コンファレンスを開催し、英文著書の刊行を視野に置いて、東アジアの格差・不平等に関する比較研究を進めている。

6. これまでの発表論文等(受賞等も含む)

・石田浩・有田伸・藤原翔(編), 2020, 『人生の歩みを追跡する 東大社研パネル調査でみる現代日本社会』勁草書房。

・石田浩(監修)佐藤博樹・石田浩(編), 2019, 『格差の連鎖と若者 2 出会いと結婚』勁草書房。

・Emily Hannun, Hiroshi Ishida, Hyunjoon Park, and Tony Tam, 2019, “Education in East Asian Societies: Postwar Expansion and the Evolution of Inequality,” *Annual Review of Sociology* 45: 625–647.

・石田浩・大久保将貴・石田賢示, 2019, 「働き方とライフスタイルの変化に関する全国調査(JLPS) 2018」からわかる若年・壮年者の暮らしむき、介護、社会ネットワークの実態(前編)『中央調査報』743: 1-10.

・石田浩・大久保将貴・石田賢示, 2019, 「働き方とライフスタイルの変化に関する全国調査(JLPS) 2018」からわかる若年・壮年者の暮らしむき、介護、社会ネットワークの実態(後編)『中央調査報』744: 1-14.

・白波瀬佐和子・石田浩, 2018, 「少子高齢社会における社会階層とライフコース—出身階層のライフイベントへの効果に着目して—」『理論と方法』33巻2号: 185-201.

7. ホームページ等

<https://csrda.iss.u-tokyo.ac.jp/panel/JLPSYM/>